

中国のほんの話 (29)

さようなら陳真さん

蔭山 達弥

北京放送局（中国国際放送局）やNHKラジオ「中国語講座」の講師として、その美声で中国の人々の生活をいきいきと伝え、多くの日本人リスナーを魅了した陳真さんが1月4日、北京市内で亡くなった。

雑誌『世界』2004年3月号から連載され、第6章以降は陳真さんの病気の進行と競いながら書かれた『陳真：戦争と平和の旅路』（野田正彰著、岩波書店 2004年）のカバー写真には、陳真さんの独身時代最後の写真が載っている。お下げを垂らした、その健気でかわいい笑顔は、常に前向きで明るい心を失わなかった彼女の精神の「美しさ」がにじみ出ている。

陳真さんは1932（昭和7）年6月14日、東京の荻窪に生まれている。父親、陳文彬は言語学者。台湾高雄の人である。少壮の言語学者だった陳文彬は来日して、法政大学に講師の職を得た。後に立教大学でも教えるようになった。中国語学者の藤堂明保、倉石武二郎や哲学者の谷川徹三、作家の野上弥生子らリベラルな知識人も親交を結んだ。父は東京に来て、何灼華を見初める。彼女は恵まれた家庭に育った才媛で、14歳まで自分で髪を結ったことさえなかったという。二人は恋愛結婚したが、母は父に勘当されての結婚だった。父は父系家長制に育った男であり、男尊女卑と亭主関白を反省することはなかった。「女の子は一人で十分」という父の態度を見た友人、堀江邑一（経済学者）が次女の陳真さんを引き取った。それから12歳まで、陳真さんは堀江家と陳家を行き来して成長した。

戦後1946年、陳真さんは台湾大学教授に赴任する父について台湾に渡った。その年の10月、彼女は14歳で『漂浪の小羊』という小説を出している。そこには陳真さんが14年の日本生活で、近隣の子供からいじめられた場面が、何度も出てくる。主

人公は小学校に入学するとすぐ、下校時に「チャンコロ!」「支那人!」「いくじなしの支那人」とののしられ石を



投げられる。4年の担任は海軍あがりの若い先生、彼は生徒の名前を読むとき、彼女の名前が読めなかった。彼は詰まって、「お前、チャンコロか」と言った。「チャンコロじゃありません。中国人です」と言うと、教師は近づいてきて、いきなり力いっぱい彼女の頬を叩いた。彼女の口から血が流れ出た。彼女は教室では涙を見せなかったが、帰り道、涙がこぼれつづけた。（野田正彰著『陳真』より引用）

それから間もなく、父は軍警備司令部に逮捕された。残された母と姉妹は台湾で生き抜き、中華人民共和国成立直前の1949年8月末に、香港から天津に入港した。父と母娘は天津で奇跡の再会を果たす。それから陳真さんは共和国の人民として生きてきた。そして北京に到達して30年目、1979年1月、もはや二度とその土を踏むことはないと思っていた東京に中国人として来日したのだった。『陳真：戦争と平和の旅路』は激動の時代を生き抜いた、中国人女性の物語である。

17歳で北京放送局に入ってから、72歳で命つきるまで、陳真さんは「中日友好のかけ橋」として40数年間、中国人に日本語を教え、日本人に中国語を教えるという事業に没頭した。「中国語を教えるということを通して、中国の文化を紹介し、中国を理解してもらいたい。理解が深まれば、心が通じあい、両国の人たちは仲良くつきあってゆける」という信念がラジオ講座のすみずみに表れていた。最後のエッセイ集『北京暮らし今昔』（里文出版 2005年）はNHK「中国語講座」に連載されたもので、北京の人々の生活をいきいきと描きあげている。変わり行く北京の様子を知りたいければ、是非、この本を読んで欲しい。

かげやま たつや（助教授・中国文学）